



漆器業界の発展に尽力

佐々木 誠

現在はダムの上流にある衣川区の増沢地区は、有名な増沢塗の生まれた地と言われている。四十軒以上の家の人が漆器の生産にかかわっており、そのほとんどの家の名字は佐々木であった。

一九一五年（大正四年）生まれの誠は、国立工芸指導所漆工科で学習した後、衣川村（現在の衣川区）の増沢で、増沢塗の復元に取り組み、増沢塗の技術の開発に取り組んだ。一九三六年（昭和十一年）には、秩父宮殿下に献上する漆器を、一九五三年（昭和二十八年）には、中尊寺で使うお経を入れる箱を製作するなど、誠の増沢塗は日本全国から注目を集めることとなった。

しかし、一九五五年（昭和三十年）、増沢地区のある場所に北上川の洪水を防ぐため、衣川一号ダムが建設されることになり、増沢塗の盛んな増沢地区はダムの底に沈んでしまうこととなった。増沢の人々は、新しい生活の場所を探し、はなればなれになって生活するようになり、漆器作りをしていた人の中には、漆器作りをやめて

しまう人もいた。

誠は、その後、平泉に家をうつし、「翁知屋」という名前の店を開いた。この名前は、増沢にあった誠の家に関係がある。流れる二つの川、「前川」「後川」が合流して、「北股川」となるのだが、そのちようど落ち合う所に家を構えていたので、増沢の漆器作りをしていた人々から、誠の家が「おちあい」と呼ばれていた。その名前に、誠が漢字を当てはめ、名付けたそうである。この頃から、誠は、新しく「秀衡塗」と呼ばれる漆器作りに取り組み始めることになる。

一九六一年（昭和三十六年）通商産業大臣表彰受賞、一九七〇年（昭和四十五年）昭和天皇、皇后両陛下の御前で秀衡碗の実演などの活躍を見せた。

また、一九七四年（昭和四十九年）には岩手県漆器協同組合理事長と日本漆工協会理事となり、漆器業界が発展するよう、漆器作り以外の仕事にも精力的に取り組んだ。

一九七八年（昭和五十三年）には、長年の功績とその努力が認められ、勲六等瑞宝章を受賞した。

一九八四年（昭和五十九年）には、「秀衡碗」という著書を著し、作られた時代や技術の違いごとに秀衡塗の作品を分類したり、その

美しさや仕事の様子を後の世の人々に残そうとした。

このように、佐々木誠は、亡くなる一九九六年（平成八年）まで、漆器業界が発展できるような力を尽くし続けたのである。

※もつと佐々木誠のことを知りたい人は、平泉町にある漆器専門店

翁知屋（店主 佐々木優弥さん）を訪ねてみてください。

※参考文献

『秀衡椀』

佐々木 誠

※参考ホームページ

伝統工芸 秀衡塗専門店 翁知屋



秀衡塗